

< 平和聖日集会が開かれました >

今年の平和聖日は8月6日、沖縄出身の佐久本正志牧師(伊勢原教会)を迎えて礼拝がもたれました。午後は、ビデオ『沖縄戦、未来への証言』を見て、佐久本先生の講演『沖縄が問いかけるもの』をお聞きしました。47名が参加しました。

講演は、いま教団で問題となっている沖縄キリスト教団との合同とらえ直しの背景にある、「沖縄のおもい」を語ることから始まり、クリスチャンと国家、天皇制との関係を鋭く指摘されました。講演の要旨をいただきましたので、そのまま掲載します。

講演のあとで教会員からは、人民と軍の区別がつかない中で日本軍による虐殺が行われたフィリピンのこと、戦場での兵士の態度のこと、沖縄・嘉手納基地を人間の鎖で取り囲んだ運動と連帯した神奈川・厚木基地での基地反対運動のこと、神奈川教区総会で新任の若い教職が沖縄との合同とらえ直し問題に正面から向かい合う発言がないことへの憂い、沖縄から学んだ「一人の百歩よりも、百人の一步」のこと、沖縄のユタ信仰と聖霊理解のことなど、意見や質問、感想が寄せられました。最後に、佐久本先生は一人一人が具体的な行動をふつうに出来るようになるようにと締めくくられました。
(社会委員：E.S)

〔平和聖日〕講演 発題要旨 「沖縄が問いかけるもの」

伊勢原教会牧師 佐久本 正志

1. 「人間的な正しさ」をめぐる議論

現在、日本基督教団では「沖縄キリスト教団と日本基督教団との合同の捉え直しと実質化」の問題が起きています。名称変更賛成、いや反対だと、あるいは合同ではなく、復帰だと、合同の議定書によって合同したのに、何をいまさら「捉え直し」が必要なのだと言う議論があります。ある人は「隘路^{あいろ}」に入っており、どうすることもできないので、この辺で決着をつけるといっています。もっともな議論のように見えます。この沖縄問題を考えるとき、イエスの話されたひとつのたとえ話が、役に立つのではないかと思います。誰でも知っている「善いサマリア人」のたとえです。ルカ10章30節以下には、次の言葉があります。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。」

沖縄の問題においても、同じことが起こっています。人間的な正しさをめぐる議論です。祭司やレビ人には「汚れたものに触れてはいけない」という間違っただ人間的な正しさがありました。道の向こう側から去っていくことが彼らの正義でありました。沖縄問題でも「何が正しいか」という議論や評論によって、正義を主張する人々がいます。しかし、沖縄は、人間的な正しさを訴えているではありません。ただ「痛い、苦しい、止めてくれ」といっているのです。

2. 沖縄はキリスト者と国家との関係、隣人との関係を示す

沖縄と日本との間には、いつも緊張関係があります。その緊張関係は、私たちキリスト者にとっても同じであります。現在の右傾化する日本社会の中にあって、キリスト者と国家との間にも緊張関係があります。沖縄は日本に生きるキリスト者にとって、国家との関係はどうあるべきか、隣人と共に生きるとはどういうことを示しているのです。

例えば、「合同の捉え直し」の関連で、沖縄教区から提案されている「日本合同キリスト教会」への名称変更についての問題は、教団政治に於いて、可決か否決かで決着する問題ではないのです。多くの人は数による勝利や敗北と言う図式で考えています。沖縄教区から提案された具体的な名称が妥当かと言う問題は確かにあります。しかし、この名称変更の問題は、沖縄教区が「沖縄の心」を代弁しているかが問題なのです。もし、沖縄教区が「沖縄の心」を代弁しているならば、教団政治において否決というかたちで決着したとしても、問題は終わらないということです。むしろ、その勝利が、沖縄との関係において「沖縄の心」を踏みにじることの上にもたらされた勝利であり、日本人キリスト者の信仰の質を明らかにするだけです。沖縄にとって名称変更の問題は、1609年の薩摩による琉球侵略から始まる問題です。大和は琉球国の中国貿易の富を270年間収奪したばかりでなく、大和は琉球人の名前を変えさせました。自分たちのような大和名、例えば「東」を「比嘉」に変えることもしました。同じ漢字圏にありながら、琉球人が自分たちに似た名前を持つことを許さなかったのです。1879年から始まる「琉球処分」の時代には、皇民化教育を徹底していきました。琉球語根絶の時代です。それは、天皇の文化や言葉が優れているのであり、琉球文化や琉球語は劣った、汚いものであるという思想の強制でした。そして戦争中には、琉球語を話す多くの沖縄人が日本軍によって虐殺されました。そして1969年の沖縄キリスト教団と日本基督教団の合同の際には、「沖縄キリスト教団」という名称は無くなりました。日本がこれまで、沖縄との関係で見せてきた「名称」や「言葉」のやり方、考え方が連続しているだけです。そこには名称や言葉を奪ってきた痛みもありません。「奪った痛み」も感じないという問題があります。

沖縄は合同の時、喜びました。それは事実です。しかし、その喜びは、差別と同化で揺れ動く沖縄の屈辱と不安の歴史の一部を示しているに過ぎません。差別の中で、日本にすりよる心とうまく乗り越えてきた安堵感は、絶えざる不安と緊張を隠しています。名前を喪失し、

言葉を喪失したにもかかわらず、喪失体験すらもできないほどの沖縄の心の葛藤を示しているのです。そこには「奪われた痛み」がないことが沖縄の問題です。

沖縄問題は、日本にとってだけでなく、沖縄にとっても同じような課題があるのです。1984年の第23回教団総会において、「実質化の推進に関する件」が可決され、その時、「沖縄に集約されている諸問題を担い、その根源にある国家と教会との関わりを宣教の課題の中で明確にする。」という取り組みが決議されています。これこそが、沖縄問題が提示する問題であり、沖縄も含めた日本に生きるキリスト者全体の課題であります。

3. 天皇制の中に生きる人は、自分がその中にいることに気づかない

人間的な正しさの議論には、生きた人間の苦しみや痛みが欠落するのです。すなわち、そこには、他者の痛みに共感する事の出来ない人間性の問題があります。なぜ、信仰者でありながら、共感することができないのでしょうか。それは、日本社会全体が天皇制のメカニズムの中にあるからです。天皇制の中に生きる人は、自分が天皇制の中にいると言う事に気づくことはありません。信仰は人間を自由にする可能性をもっていることは事実ですが、信仰者が必ずしも天皇制から解放されているとは限りません。天皇制、それは、人間の罪をゆるすメカニズムを持っているということです。人間が人間の罪をゆるすというシステムをもっているのです。分かりやすく言えば、その中にいると、自分の罪を罪だと思わなくなるシステムです。自分の責任が自分の責任ではなくなり、罪が帳消しにされるシステムです。どれほどのアジアの人々をむごたらしく殺害しても、そこでは「私は命令されただけであって、むしろ忠実に正しいことをしたのだ」ということができます。そこには、殺されていった人間も、その人間には愛する家族がいたことも、悲しみもありません。天皇制から解放されるということは、ひとりの人間がひとりの人間として他者と出会うという、人間性の解放であります

4. 他者の痛みに関感する事のできない人々

人間が共感するためには、自分自身の感情が豊かでなければなりません。悲しいことを悲しみ、嬉しいことを喜ぶ感情です。他者の痛みに関感するためには、自分自身の感情に気づいていなければならないのです。ましてや、自分の犯した罪に対して、それを罪だと自覚するためには、自分の中に、人間性の痛みや悲しみに対して敏感でなければならないのです。その人間の感情を、正義や大義名分によって抹殺し、他者を殺しても、それを罪ではなく、むしろ、正しいことだと思わせることができるならば、他者の痛みを痛みとして感じる事のできない人間が作り出されることになるのです。共感することのできない人間にとって、他者はひとりの人間ではなく、物体にしか過ぎません。それ以上に、天皇に服従しない人間を殺すことは正義とさえなるのです。悪を悪として、罪を罪として判断できないところに共感することのできない人間性の問題があります。

戦後、戦争の悲惨さを誰もが経験し、誰もが戦争は二度としてはならないと、平和を訴えているように見えます。しかし、自分の責任や罪の問題には目が向かないのです。「あの時代はしかたなかった」といいます。私たちの心の中には、人間的な正しさによって、正当化してしまう「人間的な罪のゆるし」のメカニズムが働くのです。

5. 沖縄を「かわいそう」と見る人々

沖縄問題のある集会に出た信徒が、「沖縄を援助しようとしたのに、なぜ、逆に叱られなければならないのか」と言っていたそうです。私はその場にいたわけではないので、はっきりした前後の関係は分かりません。たぶん、その人は誠実に沖縄を助けたいという気持ちから言ったのでしょう。よく沖縄に対して、「もっと具体的に何をしたいのか言ってほしい」とか、「何を求めているのか、分かりやすく説明してほしい」という人がいます。そこには「私は助ける人」、「あなたは助けられる人」という関係があります。日本と沖縄との関係は、日本人は助ける人、沖縄人は助けられる人という図式で理解できるものでしょうか。先程の戦争反対論者が、「私は戦争には反対します。しかし、あの戦争はやむを得なかった。私たちの力ではどうすることもできなかった。」ということと似ています。自分たちの罪という問題が全く欠落したところで、戦争に反対する平和主義者となり、沖縄のよき理解者となれるという幻想を持っているのです。

「沖縄はかわいそう。基地の被害があり、貧しさがあり、人間の尊厳を無視されているから。」という人がいます。「沖縄はかわいそう」な存在でしょうか。沖縄が求めている事は、「沖縄がかわいそう。何かしてあげなくては。」と思う人が、逆にその傲慢さから解放されてほしいということです。他者に対して、「かわいそう」と思う人は、心のどこかで、「自分はこの人とは違う。この人でなくて良かった。」という思いがあります。そこから「何か自分にできることをしなければ。」と思うのです。自分と他者とをはっきりと違う立場に置き、自分と他者との間に壁や垣根を置いて、共感することができると思っています。自分は助けられる人間になって良かったという満足感や優越感のために、沖縄のような「かわいそう」な存在は、いつまでも「かわいそう」な存在にいるべきだということも知れません。ましてや、「かわいそう」な存在が、大声で何かを主張する事はけしからんと言うかも知れません。それが、「沖縄教区がそんなにいやなら、日本基督教団から出て行け」という言葉になるのです。

沖縄を支援したい、経済的援助をしたいという人がいる事を私は喜んでいますが。沖縄の県民所得が年間 200 万円の中で、沖縄の教会は、牧師や信徒達は貧しさを共有しながら、平和や人権、基地問題などの課題を負っています。沖縄との連帯は、自分たちこそしなければならぬ課題を、沖縄が担っているという思いから、課題の共有としての支援や援助もあります。また、沖縄との出会いは無理解な人間をも共感できる人間へと変える豊かな可能性を、その出会いにおいて経験させてくれるからです。しかし、沖縄が望んでいることは、援助で

はなく、何よりも共感なのです。共感する事のできなかつた人間が自由へと解放されるとき、まさに沖縄が日本に存在すること、存在してきたことが、かけがえの無い恵みとして理解できるのだと思います。

6. 罪責の深化の重要性

ですから、「罪責」の問題は大切な事です。特に自分自身の罪の深化が必要です。生きた人間の苦しみや痛みと出会い、自分自身の加害者性、自分自身の罪に苦しみ、その痛みを通して人間性のある感情を取り戻し、共感する事のできる信仰へと成長しなければなりません。そのためにも、国家の罪や天皇の罪責を明らかにしなければなりません。私は「天皇の裁判」が必要だと思っています。この国は本当に謝罪しなければならない人間が謝罪していないのです。このような日本社会は病んでおり、そこから謝罪は不要であり、「侵略戦争ではなかった。」とか、「南京大虐殺はなかった」という言葉がおこってくるのです。関東大震災の朝鮮人虐殺の責任を明らかにしなければなりません。そうでなければ、今生きる在日朝鮮人や韓国人の差別も気づくことはできないのです。多くのことが、闇に葬られることの背景には、謝罪すべき人間が謝罪していないという国の姿からも分かることです。2000万人のアジアの人々を虐殺した戦争の責任を明らかにして行かなければなりません。

しかし、実際は、「無条件降伏」という言葉の幻想の影で、「国体護持」という唯一の条件を存続させるために、広島、長崎の原爆が投下され、沖縄の地上戦が行われていったのです。教団の中には、「戦争責任告白」を否定する人がいることは驚かされます。しかし、その「戦責告白」には、「天皇制」に対する批判は何一つないのです。どれだけ、天皇制との対決は困難であり、今私たちは、日本のキリスト教の歴史、天皇制と戦ったことのない教団の歴史において、いかに新しい歴史の創造への参与をしているかがわかるというものです。

7. 日本人の優越感は出会いを破壊する

ある日本人が会話の中で、「今では、あなたも日本人だから、沖縄も日本だから」という言葉を言ったことを思い出します。その人は「日本人になれてよかったね、沖縄も日本になってよかったね」という気持ちでなにげなく言ったのです。その言葉の背景には、天皇制の問題があります。日本人の優越意識があります。日本人は優れた民族であり、他は劣った民族であるという優越感があります。ですから、天皇の国土は内地で、他は外地となります。外地とは、朝鮮や台湾、沖縄などの旧植民地であります。その天皇制を頂点とする優越意識がめざす幸福とは、二等民族が一等民族になることであり、優れた日本文化を持つ日本人に同化することが幸福であり、外地人が日本語を話せるようになることが正しいことであり、それを認めない人間は、排除することが正しいことだという考えが生まれます。この外地・内地の思想が現代でも続いていることは、沖縄島の南部にあるマブニの丘にある各県の建てた慰霊

碑の碑文を読めば明らかです。ほとんどの県の慰霊碑には、私の言葉でいうなら、「よくもこんなに祖国日本から遠く離れた異国の土地で死んでいった。さぞ無念であったろう。今度戦争するときにはきっと勝利する。」というようなことが書かれています。

私は沖縄人であることに誇りを持っています。沖縄にとって、日本人の考える幸福が必ずしも幸福だとは思っていません。日本人に同化することを救いだとは考えていないのです。むしろ、違いを違いとして受容できる国になってほしいと思っています。ひとつに同化できなければ排除してもよいという考えから差別や偏見が生まれ、人間の尊厳を踏みにじりながら、自分たちは正しいことをしている、間違っているのはあの人たちだ、差別や暴力を受けても当然だという考えが生まれるのです。

8. 処分の歴史である沖縄の歴史

沖縄が日本になって、まだ 120 年ぐらいのものです。私が自分を「私は日本人です」といっても沖縄はそれが幻想であることを教えてくれます。1879 年は最後の琉球王であった尚泰が首里城を明け渡した年です。それは明治政府から送られた琉球処分官によってなされた「琉球処分」であります。その後、皇民化が徹底的になされていきます。その 1879 年の 270 年前、1609 年に薩摩は琉球を侵略し、沖縄は搾取されていきます。270 年間、薩摩に支配され、明治政府によって国を滅ぼされた沖縄が、「琉球処分」から 62 年後、第二次世界大戦を経験するのである。

沖縄戦は日本人の「処分」の思想によって、より悲惨なものになりました。子どもから老人まで動員された「根こそぎ動員」でした。そして沖縄戦は「捨て石作戦」でした。1945 年 2 月の東京大空襲のあと、近衛元首相は天皇に対し「敗戦は必至」といいましたが、天皇は「もう一度戦果を挙げてから」といいました。そのとき、敗戦していたら、広島も長崎も沖縄戦もなかったのです。日本軍は首里城の地下に司令部をつくり、死守しようとしましたが、1945 年 5 月に首里を撤退し、南部に向かいます。この後の 6 月に、沖縄戦での死者の 80% が死んでいるのです。既にこの時、日本軍の戦力の 80% は壊滅していました。しかし、少しでも、本土への上陸を遅らせるための「捨て石作戦」であり、沖縄人の生命を何一つ考えない「処分」の思想であります。

「方言を話すものは、スパイとして処分する」。その関係が日本と沖縄との関係でありました。琉球語しか話せない人間が日本軍と出会うと死ぬ事になりました。軍隊は作戦の邪魔になる住民を集団虐殺へと追いやりました。歩くことのできない軍人もまた、足手まといになるために、処分されました。南風原陸軍壕病院の撤退では 2000 人余の人間が処分されたとの壕の前の碑文には記されています。沖縄人にとって日本人はアメリカ人よりも恐ろしい存在でした。「軍隊は市民を守るために必要だ」と考えている人がいますが、それが嘘であることは、沖縄戦が教えてくれる大きな教訓のひとつです。軍隊は市民を守らず、作戦という理由

で武器を持って市民を殺し、食料を奪い、壕から追い出していくことを沖縄戦は教えています。

戦争とは兵士と兵士との戦争だと思いがちです。しかし、日本軍は食料も持たずに沖縄にやってきました。したことは、略奪であり、強盗であり、殺人でありました。日本は誰を守り、誰と戦おうとしたのでしょうか。誰が守られたのでしょうか。誰が殺されたのでしょうか。家々に押し入り強盗になり、様々なところから何の理由もなく、女性をつれてきて慰安婦としたり、壕に隠れている住民を「鉄の暴風」といわれる爆弾と弾の飛び交う外に追い出し、泣いている赤子を母親に殺させ、その結果が兵士以上の死者を出した沖縄戦でありました。強盗や殺人をしたことの罪の意識がありません。戦争だからといって「人間でなくなる」事は許されるのでしょうか。

1945年、沖縄はアメリカの占領下になります。銃剣とブルドーザーで軍事基地ができていきます。人々は軍作業と基地の前の歓楽街によって生き延びていきます。1972年の日本復帰するまでの27年間、米軍の占領下で生きてきました。裁判権はなく、米軍の犯罪も無罪になることが多くありました。レイプや殺人が毎日のようにおこりました。沖縄人は人間ではないような扱いを受けてきました。そして復帰して28年、戦後55年、「琉球処分」から121年、琉球侵略から391年、沖縄は、日本やアメリカによって苦しめられてきました。

沖縄の軍事基地の被害、それを可能にしているのが日米安保条約であります。基地被害を解決したいという人の中にも、安保条約は必要だという人がいます。もし、日本の各県にも面積相応の軍事基地があるなら、沖縄の痛みも理解する事ができるでしょう。レイプや殺人にあった女性たちの痛みがわかるでしょうか。その家族の苦しみがわかるでしょうか。苦しみのあまり精神障害になる人も多いのです。様々のことで苦しんでいる人が多いのです。沖縄の痛みや苦しみは、そう簡単に癒されそうもありません。沖縄の戦後もまだ終わっていないのです。

日本がめざすべきは、全ての軍事同盟を止めて、永世中立国になることだと私は考えています。

9. 誰が沖縄を苦しめているのか

沖縄を苦しめてきたのは、誰でしょうか。沖縄を苦しめているのは誰でしょうか。「国家」のせいにしてたり、「時代」のせいにしていただけでよいのでしょうか。闇の中にいるものは自分が闇の中にいることに気がつきません。罪の中にいる者は、自分の罪に気づくことはありません。キリスト教信仰では、罪を悔い改めるということは、まさに神の恵みであり、生命の息吹を与える聖霊の働きであります。

沖縄の問題は見えない問題です。見えない問題を見えるというところから出発するところに問題があります。自分たちと異質な他の文化との出会いは、自分たちには見えない問題が

あるというところから出発しなければなりません。見えない問題が見えてくるというところに沖縄問題があります。何よりも、「見えない」問題の根底には、自分自身の見えない罪の問題があります。知らなかった自分の罪を知らされ、深めていくところに、日本社会の中にある日本とは異なる文化をもち、民族性を持ち、歴史を持っている沖縄が、日本社会の闇の部分映す鏡のような存在として、生かされていくことになると思っています。

そのことは、何も日本だけの問題ではなく、沖縄の問題でもあります。今、沖縄教区では、「沖縄教区戦争責任告白」の検討を始めたところです。日本と沖縄との関係を加害者と被害者の関係で終わらせず、共に罪責を深化していかなければなりません。沖縄戦においては、日本人へ同化しようとする沖縄人によって多くの沖縄人が殺され、皇民化教育によって多くの人々が「集団自決」という虐殺を強いられました。戦後、軍事基地があるゆえに、沖縄から朝鮮半島へ、ベトナムへ、中東へと軍隊が派遣され、多くの人々の生命が奪われていきました。平和を求めながら、軍隊を送り出す島となり、「命こそ宝」を叫びながら、殺人をする軍隊と共に「罪の連帯」を強いられています。沖縄にとっても、沈黙してきた罪、無関心であった罪責を告白しなければならない、まだ見えていない罪があります。多くの人々の現実の死があっても、その人々の顔が見えないという共感する事のできない罪があります。

10. 対決の時代を生きる

今日の教会の状況は、天皇制や国家との関係において、「対決の時代」に置かれています。だからこそ、人間性を回復するために、日本人としての罪を自覚し、告白するところから本当に平和を実現する行動をおこしていかなければなりません。いや、その罪責告白という痛み、日本人であることの存在論的な痛みを経験する事なしには力のない行動しかできないでしょう。私たちキリスト者の信仰は、神の前に立つときが来る事を信じる信仰であります。ひとりひとりが神の前に立つ時、「本当に、あなたにできることは何もなかったのか」と言われないように、それぞれが自分にできることをしていかなければなりません。このように、沖縄と連帯するという事は、沖縄の課題を共に担うということだけでなく、それぞれの場で、神の救いの働きに参加していく事でもあります。



社会委員会からのお知らせ

次回の学習会は10月1日(日)に開きます。詳細は後日お知らせ致します。多くの方々のご参加をお願い致します。